
運命を呼ぶマニキュア

りんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命を呼ぶマニキュア

【Nコード】

N5368U

【作者名】

りんか

【あらすじ】

小指の爪だけピンクのマニキュアを塗れば、その直後に出会えた人が『運命の人』。友達からそう聞かされた私は、占いとかおまじないとか全く柄じゃないけれど、実は少女漫画とメロンソーダが大好きな高校一年生。半信半疑で帰宅する途中私が出会ったのは――、幼い頃から一番苦手なあいっだった……！

（前書き）

突発的に浮かんだお話です。

需要あるのか、こういうの？ と疑問に思ったものの、一人称の練習になるかと勢いのまま書いてみました。

いろいろお見苦しい点はあるでしょうが、最後までご覧頂けると幸いです。

別に何かを期待していたわけじゃない。
興味がわいて、じゃあ私の場合はどうなんだろうってちょっと思っただけだった。

左手の小指の先に塗った、ピンクのマニキュア。放課後、ファーストフード店に立ち寄った際に友達に塗られてしまったそれ。

友達が笑いながら教えてくれた。

『こうやって小指の爪だけに塗るでしょ？ でね、直後に出会えた人が——』

私の運命の人、なんだそうだ。

「……馬鹿馬鹿しい」

友達と別れ、一人になった帰り道。いつものように茜色に染まる中を歩きながら、私は大きく息を吐いた。
手にしたファーストフード店の赤色の紙コップ、それに添えられた小指をチラと見て、もう一度歎息する。

そもそも、こんな女のような趣味は柄に合わない。

男兄弟ばかりに囲まれ、物心ついたころから家の道場で学ばされた空手の腕は、既に県内トップクラス。

そんな女が、おまじないを信じて運命の人探し？　きいてあきれ
る。

紙コップを持つ手に、ギュッと力がこもった。ペキッ。プラスチ
ックのフタが、ちよつとだけ凹む。

ストローに口をつけ、子供の頃からお気に入りのメロンソーダを
飲みながら、私はあることを思い出した。

「そうだ、今日は例の新刊が発売される日じゃないか！」

例の新刊。私の人生のバイブルとも言うべき、某マンガ。兄貴た
ちに内緒で集めている、その、いわゆる少女マンガというやつだ。
続きが読める、そのことにへの字になっていた私の口元がゆるん
でいく。

「あの後、どうなるんだろう？　やっぱり、彼女が彼に本当のこと
を告げるべきだとは思っけれど」

近づいてくる、交差点。そこを曲がれば、本屋はすぐそこだ。
とはいえ、そんなに車も通らないところだから、信号も横断歩道
も特にない。

『曲がり角』のフレーズに、私の頭にとあるワンシーンがよみが
える。

「そつえば、あのマンガの二人の出会いが確か――。そうそう、
こんな角を曲がってすぐに二人がぶつか――きやあッ」

私の思考が、完全に止められた。

クラリと回る世界で思わず飛び出してしまった女つばい悲鳴に、
耳をふさぎたくなる。

反射的に受身を取ろうとした身体が引き寄せられ——、ドサツ。倒れこむ音。気づけば私は、マウントポジションを取った状態で、相手を見下ろしていた。

謝ろうと口を開いた私だったが、相手が誰かを確認したとたん、それは驚きと疑問に変わった。

「な、なんでおまえがこんなところにいるんだっ!？」

上ずった私の叫び声に、目の前の相手は不機嫌そうに鼻をならすとプイツと顔を逸らした。

「それ、こっちのセリフだし。とりあえずそこ、どいてくんない? 橘川、おまえ重すぎなんだよ。また太ったんじゃないの?」
「な……っ」

開口一番の失礼きわまりない発言に、私の頬が見る間に熱くなっ
ていく。

藤代直哉。ふじしろなおや 学年は私と同じ、高一。だが、ヤツが通っているのは県でも有数の名門私立校。

茶色がかったサラサラの髪に、切れ長の瞳。容姿端麗で頭脳も明晰、せきしかも父親はどこぞの大会社の社長。三拍子そろった、いわゆる女子にモテそうな部類だった。

ヤツの父親となぜだか旧知の間柄らしい私の親父のおかげで、幼い頃からの知り合いで——。認めたくはないが、幼馴染というやつなんだろうと思う。

——私の、一番苦手とするヤツだった。

急いでヤツの上から移動し、そばに落ちていた赤色の紙コップを

つかむ。奇跡的に無事だったそれに飲み物が残っていることを確認し一気に吸い込んでいると、起き上がったヤツからポツリと一言。

「あ、それ。俺のメロンソーダ」

「なに……っ」

ストローから口が外れ、思わずメロンソーダをふきだしそうになりながら、私は赤色の紙コップとヤツとを見比べる。

俺のメロンソーダ？

このストローをヤツが使っていたということか？ それを今、私が……。それって、かかか間接——っ！

「~~~~っ!!」

声にならない悲鳴をあげながら私は赤い紙コップをヤツに押し付けると、もう一つ地面に置き去りにされていたオレンジの紙コップを手に取り、猛ダッシュでその場から駆け出した。

ヤツが小さく笑いながら、まだ一口も飲んでなかったんだけどなあ、と受け取ったストローに口をつけていた気がしたが——。そんな細かいこと、今更どうでもよかった。

「ありえない、ありえない、ありえない……！」

何度もつぶやきながら、私は自分の早まった行為を呪いたくなかった。

『運命の人』がああ男……。考えただけで、全身が総毛立つ。

オレンジ色の紙コップのストローに口をつけながら、私は先ほどの光景を記憶から抹消する方法を懸命に探した。が、考えれば考えるほど、頭は真っ白に染まっていく。

大丈夫だ。落ち着け、由良^{ゆら}。落ち着け、私。間接キスの一つや二つ、どうってことな……。。

……………。

うああああああああああああああああ。

口の中に広がる、大好きなはずのメロンソーダ。

それがコーラに変わっていたことに、私は全く気づきもしなかった。

（後書き）

本当に間接キスしたのは、さてどちらだったでしょう？（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5368u/>

運命を呼ぶマニキュア

2011年7月8日14時48分発行